

目的 児童期は年齢的・発達的变化からみると、友だちとの活動的な体験を通じ、その生活圏を近隣から地域へと拡大していく時期にあたるが、生活時間の過密化や地域環境の変化等、遊びをとおして地域と関わり合うことが困難な状況になってきている。しかし一方では、生活に必要な物やサービスが次第に外部化・商品化され、児童の日常生活においても、情報を得ることが容易になり買い物行動をとおして地域と関わるが多くなったとも考えられる。本報告では、このような児童の実態を調査し、日常生活における地域との空間的関わりを明らかにし、発達過程における状況を考察する。

方法 香川県内の環境の異なる2小学校の全児童(計439名)を対象に、1992年11月-12月、集合調査法を用い、クラス毎に教師による説明を加えながらアンケート調査を行った。どこへ何をしに行ったかという観点から、遊び、買い物、塾等の項目について尋ねた。1週間の買い物と児童が遊んだ場所については、毎日調査した。1、2年生については児童に持ち帰らせて、父母に記入してもらった。

結果 遊びからみた児童の地域との空間的な関わりは、約5割が自宅で、約2割が友の家で遊んでおり、よく行く友の家は児童にとって地域での行動拠点として重要である。また商店街にある校区の児童では、商店街や駐輪場(約1割)を、農村地域では家の前の道や庭(約2割)が挙げられていた。さらに児童は買い物行動を通じ地域との関わりを持ち、子どもだけで買い物に行くことが高学年になるほど(低学年週1人当たり0.6軒→高学年3.1軒)多くなり、スーパーやコンビニ、ファーストフード店等がよく行く店として挙げられている。